

公表

事業所における自己評価総括表

○事業所名	果実の木大津教室		
○保護者評価実施期間	2026年2月12日		～ 2026年2月22日
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	27	(回答者数) 21
○従業者評価実施期間	2026年2月12日		～ 2026年2月22日
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	4	(回答者数) 4
○事業者向け自己評価表作成日	年 月 日		

○ 分析結果

	事業所の強み(※)だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	当事業所では、学校休業日を中心にクッキング活動、野外活動、制作活動、体験活動など、子どもたちが楽しみながら参加できる多様な活動を取り入れています。これらの活動を通して、生活能力の向上や社会性の育成、協力する力や役割意識を育むことを目的とした支援を行っています。 特に体験型の活動を重視し、子どもたちが実際に「やってみる」「経験する」機会を大切にすることで、達成感や自己肯定感の向上につながるよう支援しています。また、子ども一人ひとりの特性や発達段階に配慮し、安心して参加できる環境づくりに努めています。	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもが主体的に活動に参加できる環境づくりを大切にしています。 ・成功体験を積み重ねることで自己肯定感の向上を目指しています。 ・地域資源の活用や社会体験の機会づくりを行っています。 	今後は、各活動の目的をより明確にし、個別支援計画と活動内容の関連性を意識した支援の充実を図っていきます。また、子ども同士の関わりの中で社会性やコミュニケーション能力を育てる支援を意識し、ソーシャルスキルトレーニングの要素を取り入れた活動の充実にも努めていきます。さらに、保護者への活動内容の発信や情報共有を充実させ、事業所での支援内容を分かりやすく伝えることで、家庭との連携をより一層深めていきたいと考えています。
2	当事業所では、隣接するデイサービス事業所と連携し、ハロウィンやクリスマスなどの季節行事を通して定期的に交流活動を行っています。世代間交流の機会を設けることで、子どもたちが地域の方々と関わる経験を積み、挨拶やコミュニケーションなどの社会性を育む機会となっています。また、交流を通して相手を思いやる気持ちや社会の中での関わり方を学ぶことができ、子どもたちにとって貴重な体験の場となっています。地域とのつながりを大切にしながら、安心して参加できる交流活動の実施に努めています。	<ul style="list-style-type: none"> ・世代間交流を通して社会性の育成を図っている ・地域資源を活用した支援を行っている ・地域とのつながりを大切にしている 	今後は、交流活動の機会を継続しながら、子どもたちが主体的に参加できる内容の工夫や、交流の目的を明確にした活動の充実を図っていきます。また、行事交流だけでなく、制作活動やレクリエーションなど共同で取り組める活動の検討を行い、より多くの交流機会を作りたいと考えています。さらに、子どもたちが安心して関わるができるよう支援体制を整え、地域とのつながりを大切に活動の充実に努めています。
3	当事業所では、保護者参加型のプログラムを実施し、保護者を事業所へ招待することで、子どもたちの活動の様子や成長を身近で感じていただく機会を設けています。これにより、事業所での支援内容への理解を深めていただくとともに、家庭と事業所が連携して子どもたちの成長を支える環境づくりに努めています。また、乗船体験などの社会体験活動を通して、公共交通機関の利用方法や公共の場での過ごし方、時間を守ることの大切さを学ぶ機会を設けています。さらに、買い物体験を取り入れることで、金銭の扱い方や店員とのやり取りなど、日常生活に必要な力を実践的に学ぶ支援を行っています。	実際の体験を通して社会性や生活能力の向上を図る活動を行っていることが当事業所の強みとなっています。	今後は、保護者参加型プログラムの内容をさらに充実させ、保護者同士の交流や情報共有の機会づくりなど、家庭支援の視点を取り入れた取り組みを検討していきます。また、社会体験活動については、活動の目的や学びのポイントをより明確にし、個別支援計画と関連付けながら実施することで、子どもたち一人ひとりの成長につながる支援の充実を図っていきます。さらに、地域資源の活用を広げ、さまざまな社会経験を積むことができる活動の充実にも努めていきます。

	事業所の弱み(※)だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	出口支援に向けた取り組み	<ul style="list-style-type: none"> ・居場所づくりや楽しく通うといった利用継続意識により次の進路を見据えた支援になりにくくなっている。また、就労継続支援、生活介護相談支援などの情報が不十分 	公共交通機関利用や仕事体験、ボランティア活動といった出口を意識した支援プログラムを構築する。また、保護者へ卒業後の選択肢を提示できるような情報を収集していく

2	<p>定期的な面談や家族支援プログラムの実施</p>	<p>面談や家族支援の仕組みが未整備</p> <ul style="list-style-type: none"> • 面談の年間計画がない • 面談の目的や内容が明確になっていない • 面談の案内方法が限定的 <p>保護者支援の優先度が低くなっている</p> <ul style="list-style-type: none"> • 日常連絡帳や送迎時の会話で済ませてしまう • 「困りごとが出たら対応」という受け身の支援になっている 	<p>① 年間の保護者支援計画を作る。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 年1回面談 2. 年1回保護者交流 <p>② 面談方法を柔軟にする</p> <ul style="list-style-type: none"> • 電話面談 • オンライン面談 • 送迎時の短時間面談 <p>③ 面談のテーマを明確にする</p> <ul style="list-style-type: none"> • 家庭での困りごと • 学校との関係 • 生活習慣 • 思春期の対応 • 進路
3			